戦争を知らない世代へ⑰沖縄編

血に染まるかりゆしの海

—父母から受け継ぐ平和のたいまつ—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑰

血に染まるかりゆしの海——父母から受け継ぐ平和のたいまつ

昭和51年6月23日　初版第1刷発行

編者© 創価学会青年部反戦出版委員会
発行者 栗生一郎
発行所 株式会社 第三文明社
郵便番号 101 東京都千代田区猿楽町2-5-4
振替 東京5—117823

1976 Printed in Japan　0036—7017—4438

発刊の辞

沖縄は四方を海にかこまれた豊かな国土である。古くよりこの海は、あらゆる幸をはこぶ母なる海として、沖縄県人の心をつつんできた。「かりゆしの海」――この豊饒なる沖縄の海が戦火で血に染ってから三十一年。

私たち沖縄青年部が沖縄戦体験の集録をはじめて三年が経過した。その間、約三百人の体験を集録し、これまで、第一集『打ち砕かれしうるま島』第二集『沖縄戦―痛恨の日々』を発刊している。つづく第三集は、名護の中・高校生のメンバーにより収集活動が行われ、今回、一冊の本となって出版される運びになったことは誠に意義あることである。

戦争が終って三十一年になった。総理府の調査によると、今日、戦後生まれの人口は日本の約半数を占め、その〝戦無派〟から生まれた子供たちは人口の一五パーセントにも達しているという。戦争を知らない世代は年とともに増えつづけていく。「六月二十三日」(沖縄終戦の日)が巡りくるたびに、人びとはあのいまわしい戦争が二度と起らないことを祈る。その心は現代の世代に

どのように受け継がれているのだろう。戦争を体験した世代と戦争を知らない世代の人口が逆転してしまった現在、戦争体験が過去の出来事としてそのまま風化してしまうことが一層心配されるようになってきた。

私たち創価学会青年部の根底にあるものは、生命の尊厳の理念に貫かれた仏法の思想である。戦争は尊い人間の生命を無残に奪うばかりでなく、現代戦の脅威である核兵器は地球のすべてを破壊してしまう。私たちは戦争の絶滅を訴えつづけている。

青年部といえば、そのほとんど全員が戦争を知らない世代である。その世代の一人一人が心の中に反戦の砦を築いていくためには、前世代の人びとが体験した沖縄戦の体験をしっかりと受け継ぐことである。「聞こう聞かせよう原体験」をスローガンに運動は開始され、青年の手で体験の収集がはじまった。

原体験を受け継ぐ——そのためには、活字になった戦争体験に接するだけでなく、体験した人からヒザづめで直接話を聞き、話し合う機会を数多く持っていくこともまた大事である。このような考えから、昨年は全県下、百余の会場で「戦争体験を聞く会」を開催、数千人の青年が参加した。

そのような戦争体験継承の運動の波動は着実に広がりを増している。名護の中・高校生による継承運動もその一つであろう。自分たちの住む北部地域の戦争はどういうものであったのか。血

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

縁の人から手始めに体験を聞き、集録した。後世のためにも、戦争反対のためにも、記録として残したい、との考えから今回の出版となったものである。平和へのうねりを高めていくためにも、戦争体験継承運動の波動をさらに着実に広げていきたい。

最後に、体験の集録、編集にたずさわったメンバー、本書の出版に尽力された反戦出版委員会、第三文明社の関係者に心から感謝したい。

昭和五十一年六月二十三日

創価学会青年部沖縄県青年部長
新垣　昇

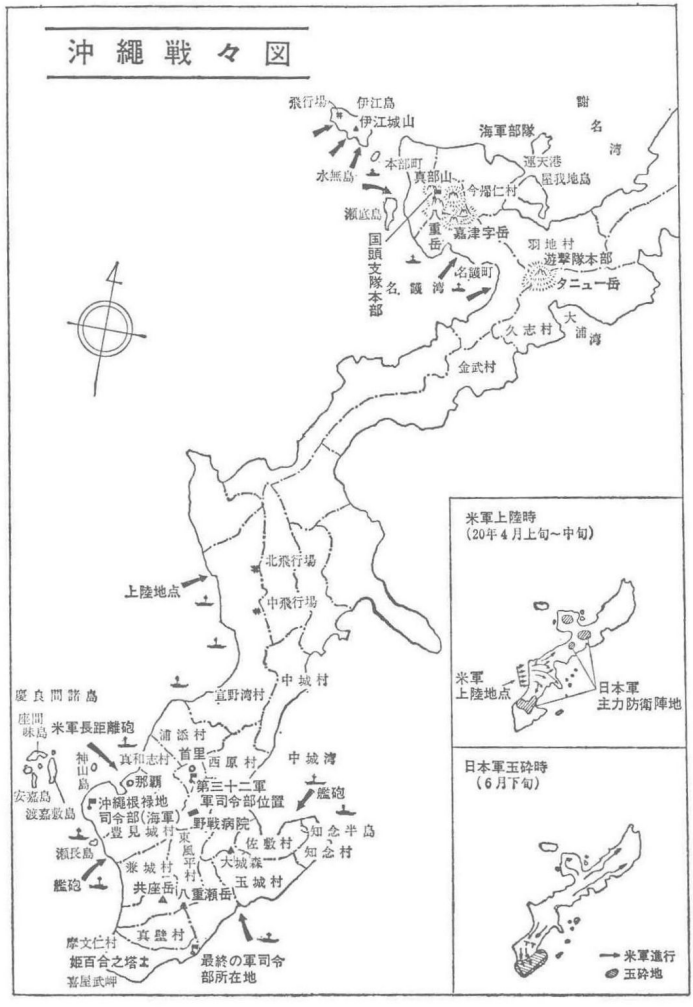
目次

	体験者	取材者	
発刊の辞			
沖縄戦の敵は日本軍だ	上原シゲ	上原春樹	10
護郷隊員として	宮城光信	宮城辰次	17
日本兵に殺された部落の人びと	金城ウミト	金城きよ子	25
国頭守備隊	尾崎里志	阿波根冒邦	31
最後まで山に残った私たち	金城シズ	金城賢幸	42
戦争に奪われた二人の息子	山城マツ	仲間ユキミ	46
息子よ、どこに！	金城ヨシ	金城きよ子	52
伊江島の滅亡	岸本泰吉	上原直樹	59
斬りこみ隊に生き残って	古堅清光	知念洋子	69
原始人のような山奥の生活	喜友名節子	新城朝信	75
私は戦争に人間を見た	上地清規	山入端利光	79
ハワイ送りを免れた私	小波津寛徳	小波津一郎	85

勝利を信じて……諸見里朝喜　諸見里恭子　90
親切なアメリカ兵……玉城慶子　渡口康宏　94
爆弾と米兵に追われて……大城節子　大城行雄　98
助けはどこにもない……宮里カメ　宮城育子　102
消えよ！　ヤマトダマシイ……比嘉和子　山入端利光　106
悲惨をきわめた非戦闘員……具志堅芳子　具志堅二男　117
空には爆撃機、足もとにはハブ……上地エミ　仲嶺　恵　122
壕にあけ壕にくれた日々……高崎豊次　平良　肇　127
戦争なんて……比嘉康則　徳本恵子　131
四苦八苦の古宇利島……小波津ヒロ　平良　肇　137
戦後もつづいた山中生活……屋良竹野　金城悦子　141
あゝ！　伊江島……上間真勇　比嘉純子　147
弾雨の中で食糧さがし……宮城和子　宮城千津子　152
暗闇に食糧を集めた日々……宮城保江　宮城由美子　156
お墓に住んでいた私たち……伊野波貞子　伊野波京子　162
勤労奉仕の日々……長田　繁　長田昭子　168

これが戦争なんだ……金城ウト　上原　章　172
馬の水まで飲んで……棚原エミ　宮城幸江　178
妹と二人で死を覚悟……棚原正幸　国場英一郎　182
子持ちには入れなかった防空壕……与那嶺ウシ　磯　勝美　189
子供達の死に耐えて……大城健親　山入端たか子　198
死と隣り合わせに生きて……山田初子　知念幸枝　208
あとがき

沖縄戦々図



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

血に染まるかりゆしの海

沖縄戦の敵は日本軍だ

体験者　上原シゲ（65歳）
取材者　上原春樹（20歳）

私は沖縄本島の最南端にちかい糸満に住んでいました。昭和十九年も夏をすぎたころから戦争の情勢はとみに悪化し、軍部から疎開の割りあてがなされました。糸満は国頭へ避難と決められましたが、私たちは祖父の代から久志のカヌシチャというところに土地を持っていたので、そこへ疎開することにしたのです。糸満からカヌシチャまでの数十里の道を昼は隠れ、そして夜になっては歩きつづけました。そのときの私は身重の体で、しかも三人の子供をつれていたために他の人のように前進することはできません。お腹をすかせた子供たちをなだめながらやっとカヌシチャについたとき、身も心もヘナヘナに疲れてしまっておりました。

当時、男の疎開は友軍に禁止されていました。けれども、漁師であった私の夫は瀬嵩にいる友軍の食糧として魚をとることを条件に、特別の許可をうけたのです。ために、カヌシチャに疎開してからも夫は魚とりにあけくれました。それをしなければ友軍に逆らったことになります。サバニという舟で糸満から喜屋武岬をまわり平安座をへて瀬嵩にいたる海上は、上陸まえのアメリ

カ軍が艦砲射撃をもっとも激しくしたところです。海は軍艦でいっぱいだったはずなのに、それでも夫は無事にもどってきました。帰りを待ちわびる私たちにとって、その間の数日は何十日にも思われたものです。カヌシチャでの私たちの生活は、食糧確保がもっぱらでした。とれた魚を友軍に持っていっては交換した米やミソ、あるいは村からの配給などがありました。そのころ魚をとる人は私たちのほかにいなかったのでいくらでもとれ、食糧にはそれほど不自由はしませんでした。

しかし、カヌシチャにいつまでも腰をおちつけてはいられませんでした。ついに敵の上陸です。迫撃砲の轟音は、昼夜の別なく響きわたる情勢になりました。夜が昼より明るくなる照明弾にも驚かされたものです。兄嫁は突然の照明弾に腰をぬかしてその場に坐りこんでしまい、背負われながら逃げたこともありました。やがてその明るさにも慣れ、夜空に高々と打ちあげられるたびに「それ今だ。逃げろ」といった具合に、照明弾を避難に利用するようになりました。ところが、その照明弾というのはあとで知ったわけですが、敵が私たちを発見するために打ちあげたものだったというではありませんか。今考えるとそれこそ笑い話ですけれど、「それ逃げろ」なんて、そこで万が一に見つかってしまったらと思うと身ぶるいがします。

私たちが避難したのは嘉陽の山奥で、海岸から数キロはなれた所です。谷間の川は水量が豊富であって木がおり重なるように茂っていたものですから、火をおこしてもよほどのことがないか

ぎり気づかれる心配はまずありませんでした。そして、戦後の沖縄からは想像もつかないでしょうが、山奥のジャングルに小屋をたてて住んだのです。また、その山はハブ山といわれるくらいハブの多い山で、小屋をたてるときは、ハブが入りこめないように周囲を魚の網ではりめぐらして作りました。朝起きると、その網にハブがからまってゾーッと鳥肌のたつこともたびたびでした。医学が発達した現在でもハブにかまれて死ぬ人があります。当時は、死人の続出でした。かまれたときの治療は、指先や腕だったらナイフで切断するのです。また、傷口にアルコールをつけて口で血を吸いとったりすることもありますが、いずれにしても助かる率はわずかでした。ハブにかまれた十人のうち五人は死に、三人は不具になるという当時の状況だったのです。しかし、ハブのいない所へ逃げようにもその場所が私たちにはありません。海上には軍艦がずらりと並んだこの小さな沖縄の島で、安全な場所といったら山の奥よりほかにないのです。で、そこには当然のことハブがいるというわけでした。したがって私たちの敵は、アメリカ軍とハブの両方だったといえるでしょう。

漁に出ていた夫をむかえに海岸へ降りていったある夜、私はアメリカの飛行機に機銃掃射されました。無意識に子供の手をにぎりしめて一目散、山へ山へと逃げました。弾がビシッビシッと音をたてて地面に突きささります。死ぬも生きるも一緒なんだ、と私は子供の手をありったけの力できつく握りしめたものです。こうしたホッと一息つく余裕さえなかった避難生活。毎日毎日

が苦しみの連続で、子供たちもどんなに辛かったことでしょう。ただ、今でも誇りにできることが一つあります。それは、子供にひもじい思いをさせずにすんだことです。海でとった魚貝類を米やミソと交換し、子供の分だけでも食糧はなんとかありました。

沖縄戦がもっとも悲惨な様相をみせていた昭和二十年五月二十一日、長女が誕生しました。しかし、時が時だけに喜んでいいのか悲しんでいいのか、複雑な心境にならざるをえません。おりからの食糧難に加え、いつ敵の砲弾にやられるかもしれない不安……。しかも、味方と信じていた日本軍は、敵に発見されるからといって泣きじゃくる赤ちゃんを殺してしまう。そのような信じられないことが私の周囲にはあったのです。この私といえば栄養不足と極度の疲労に体は衰弱し、まるで半病人のようでした。ですから、そうしたさまざまな悪条件のなかに生まれてきた長女は、手のひらに包まれるくらい小さな小さな子供でした。もはや長くは生きられまい、私は内心で思ったものです。が、一週間二週間とすぎるころから元気な泣き声をあげはじめたではありませんか。この泣き声がもとで日本軍に殺される当時でしたけれど、私はうれしくてうれしくて、飛びあがって喜びました。徐々に元気になっていく私の子供。一時は死んだも同然であったわが子の姿に、戦争の犠牲にさせてなるものか——と、私は心に強く決意したのです。今ではその子も立派に成長し、二児の母親になっております。

産後、私は腰の骨をはずしてしまい、数十日のあいだ横にならざるをえませんでした。十五歳の長男を頭に五歳の次男、三歳の三男と子供たちは幼く、横になったきりの私のそばに今にも泣きそうな顔をして寄ってくるのを見るのは、とても辛いことでした。しかし、幸いなことには親せき十数名が一緒の生活でしたので、炊事や洗濯などをいやな顔ひとつせずしてくれました。

雨期になり、四十日の大雨がはじまったのはそのころです。火をおこそうにも燃えるものがなく、寒いなかをすごしました。そして赤ちゃんのオムツの乾かないのには、本当に困りました。そこで男の人は燃えつきの早い竹を刈り、それを細く切って急場をしのぎました。そのほか、白いシラミにも悩まされたものです。身につけているものは上から下まで、縫い目という縫い目にシラミがいっぱいでした。つぶしてもつぶしても絶えないシラミ。とても信じられないでしょうが、あまりにも血を吸いとられて体が衰弱した人まであったくらいです。

しかし、アメリカ軍にせよ、ハブにせよ、さらには食糧難にせよ、それらは私たちの本当の敵ではなかったのです。沖縄戦の本当の敵、それはこともあろうに日本軍でした。私たちの近くにいた日本兵は、昼は山に隠れ、夜になると民家を襲撃しては食糧を掠奪する者が多かったのです。もちろん、抵抗したために殺される人は数えきれず、私の夫もあとすこしで殺されるところでした。私たちはこの野獣のような日本兵から食糧を守るため、避難民が米やミソと交換するために持ってきたソテツを食糧箱の上にして、その下に大事な食糧をかくしたものです。私たち沖縄の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com